続続・石垣りん年譜

――石垣りん自身の著作を参考にして（完）――

竹中　典子・西原　大輔

この年譜は、詩人・石垣りん（一九二〇～二〇〇四）の随筆の中から、詩人自身の人生の、一九七六（昭和五十一）年から晩年までにかかわる情報を抜粋し、整理したものである。

従来の最も信頼に足る年譜として、「石垣りん自筆年譜」がある。『現代詩手帖特集版　石垣りん』（思潮社、二〇〇五（平成十七）年五月二十日）の二二〇～二二二頁に掲載されている。この自筆年譜は、一九九八（平成十）年四月までが石垣りん作成のもので、それ以降は編集部の手によるものである。なお、石垣りんが自筆年譜を作成するにあたり、都留文科大学の学生清由岐代氏が卒業論文で作成したものを、石垣りんは参考にしている。（未発表作品「ひとの力ばかり借りて」）。

石垣りん年譜については、『詩と思想』（第三巻第三九六号、土曜美術社、二〇二〇（令和二）年七月一日）掲載の「石垣りん略年譜・書誌」（一〇〇～一〇一頁）もあるが、石垣りんの随筆の内容は反映されていない。

一方本稿は、新たに石垣りんの著作の内容を反映している点に特徴がある。詩人自身による記述の真偽について確認することは困難であるため、著作を引用する形で年譜に記載した。本稿は、『現代詩手帖特集版』の自筆年譜を中核に据え、石垣りんの随筆の情報を加えた。参照したのは、次に掲げる石垣りんの四随筆集、および単行本未掲載の随筆作品である。

『ユーモアの鎖国』北洋社、一九七三（昭和四十八）年二月十二日

『焔に手をかざして』筑摩書房、一九八〇（昭和五十五）年三月五日

『夜の太鼓』筑摩書房、一九八九（平成元）年五月二十五日

『詩の中の風景――くらしの中によみがえる――』婦人之友社、一九九二（平成四）年十月十五日

右の四随筆集に収録されていない文章の収集にあたっては、南伊豆町立図書館の温かいご配慮を賜った。二〇二三年十月三十一日現在、南伊豆町のウエブサイト「石垣りん文学記念室 収蔵品について」（https://www.town.minamiizu.shizuoka.jp/docs/20180323000027/）には、「未刊散文資料情報」のＰＤＦが掲載されている。この一覧に挙げられている全作品を入手し、目を通した。年譜に引用した随筆作

品の書誌情報は、末尾の「引用文献一覧」に掲げてある。

一九七六（昭和五十一）年　満五十五歳―満五十六歳

○話が変りますが、先日（四月一九日）の新聞には、政府が、昭和四五年以来農家から買い上げ、倉庫にたまってしまったカドミ準汚染米を私たちの食卓に回す計画がスタートしたことを告げていました。不安に思う私たちに、安心して食べさせる〝世論づくり〟を目論んでいるらしい、ということです。私は今から二十年以上も前のこと。昭和二九年七月、黄変米の配給決定をした政府の処置を思い出していました。（FM東京「世論づくり」一九七六（昭和五十一）年四月二十六日、三頁）

○そして両隣り、ですが。こちらは壁一重が多い。アパート、も少しましな言い方をすればマンションですか?。私はコンクリート長屋だと思っていますけれど。近所づき合いが少ないほど「私の所はわずらわしくなくていい。」などといわれ勝ちです。（FM東京「道」一九七六（昭和五十一）年五月十七日、二頁）

○最近は、朝出勤してきて「オハヨウ」と皆に向かって言う人が少なくなってきたようです。それはその部屋の雰囲気や、会社の風習、仕事内容にもよりましょうが、上から決めてどうこうするものでもありませんので、これはごく個人的なことになります。（中略）でもやはり何となく、一日の始まりのケジメがつかない感じがして「もうネ、挨拶したの、しなかったのと、イヤなキモチになるの不愉快だから、かまわずにオハヨウ、と声をかけて、その先むこうが返事をしようが、しまいが、気にしないことに決めてるのよ。」と、いう人もおりました。（中略）相手が人間である場合素直になれないというのは、やはり階級的な気持や、損得など、対等にはつき合えない、こだわりの根がはびこっているせいではないか、と案じてみたりいたします。（FM東京「挨拶」一九七六（昭和五十一）年一月二十六日、三・四・五・八頁）

○今日は五月二四日。太平洋戦争の最後の年のこの日の夜、東京山の手、と呼ばれる一帯がアメリカ軍の大空襲にあって、一晩で焼き払われたことを思い出します。火は翌日の夜をも赤く焦がし続けました。（中略）家もいのちも、みんな国のためになくしたとあきらめて、終戦後、前にも増して貧しい出発をした、そして今日まで歩いてきた。その間中、ずいぶん色々なことを新しく知り得た、と思い、目もさましたと私は考えてきましたが、うぬぼれもいいところだ、とあきれるようなことが最近、ことに多く、ガッカリしております。（FM東京「スナップ」一九七六（昭和五十一）年五月二十四日、一・三・四頁）

○きょうは長崎に原爆が落とされた日。回り燈籠の絵がひとまわりして、目の前で影を大きく写し出すように、終戦の記憶がよみがえってまいります。（中略）終戦のあとに残された、終ることのない戦いが、どれだけの数で用意され、残されていたか。その苦しみに立たされた一人一人に、お国はどれだけ手を貸してくれたか、とたずねたくなります。（中略）（戦争について）おろかな私の目に写しだすのに、歳月は三十一年のヒマをかけたのか、と驚き、まだまだ何も知り得ていないらしいことを思うのでした。（FM東京「遠くからの風」一九七六（昭和五十

一）年八月九日、一・二・四頁）

一九七七（昭和五十二）年　満五十六歳―満五十七歳

○台所仕事をしながらラジオを聞いていたら、アナウンサーの声が、母親の投書を読み上げている。その文章の断片が心にふれてきた。（中略）そのときの投書の主旨らしいものは、〝やさしさ〟についてであった。その母親は平常わが子に「なによりやさしい人間になってほしい」と語りかけているという。エライ人にならなくていい。金持にならなくていい。人に対して心づかいの細やかな、思いやり深い人に育ってくれればいい。それにはやはり勉強しなければならない、本を読まなければならない、というのであった。（中略）〝やさしく〟生きることがどんなに大変か、身をもって生きてみせて、そのことでひどい目にもあって、それでもやさしさが大事、と子に感じさせるまでにどれだけの月日を重ねなければならないか？（「やさしさ」『焔に手をかざして』、六四～六五頁）

一九七八（昭和五十三）年　満五十七歳―満五十八歳

○人とつきあう法というとき、その「法」はいったい何を指すのでしょうか。方法の法、技法の法、それとも法律の法？たぶんその人なりのやり方、方法と考えたらよいのでしょう。けれど私には世間でのとりきめ、明文化してない法律のようにも受けとれます。少し長く生きてきて、その間、私がつきあう以上に、人は私とつきあってくれたのではないか。良くも悪くも、私はこうしてもらった、このように扱われた、ということの方が多いように思うのです。その点でかなり受身な立場におりました。ですから私の側に人とつきあう法があるとすれば、それは人が私とつきあってくれる、その方法に合せて生きて来たといえます。戦中戦後、ごく最近まで続いたＯＬ生活中の身の処し方でもありました。（中略）私は、どんな素晴らしい人がボロを着ているかもわからない、どんな情けない人が高官でいるかわからない、そんなオソレとあこがれとコッケイを抱きながら、風のように歩いて生きたいなァと思います。（「オソレとあこがれとコッケイと」『夜の太鼓』、六六～六七頁）

一九七九（昭和五十四）年　満五十八歳―満五十九歳

○五月、詩集『略歴』花神社刊。第四回地球賞受賞。七月、妹初江、千葉県の婚家先で死去。（自筆年譜）

○ここ十年ほどの間に書いた詩の中から、四十七篇をまとめて、詩集「略歴」（花神社刊定価一、四〇〇円）を出しました。少女のころ就職した銀行を定年退職したというのに、詩集は文庫本を除くとこれが三冊目というたどたどしさです。こんどの本の中で一番新しいのは〝詩とメルヘン〟今年四月号に載せていただいた「鬼籍」。（未発表作品「無題」掲載年代不明、一頁）

○異母妹［初江］は赤ん坊のとき、見ていてくれた人が目を離したすきに、家のいろりに落ちて顔半分のやけどを負った。その顔で東京に暮すのは困難だろうと、もうひとつには叔父夫婦に子供がなかったことから、千葉へ養女に行き結婚もした。戦後、整形外科の発達で、ある程度の植皮がなされたけれど、半面の引っつれは終りまで痕跡を残した。終りまで、と言うのは

長い病院生活の後、昨年［一九七九年］の七月、四十歳なかばで亡くなったからである。（「大茄子・小茄子」『夜の太鼓』、三六～三七頁）

○何年か前［一九七九年］、ＮＨＫの「私の自叙伝」に出た。決められていた録画の日、入院中の異母妹がだいぶ悪いと知らせて来た。子供のとき他県へ養女に行ったまま、往き来の少ない間柄になっていた。仕事で見舞いに行くのがおくれている間に亡くなってしまった。その柩（ひつぎ）が婚家先に帰宅したちょうどその時、誰のはからいでか、「私の自叙伝」がはじまっていたという。（「私のテレビ利用法」『夜の太鼓』、三〇頁）

○私いちど、午前中に放送局で自分の書いた詩を朗読したんです。すると「ダメだ、まだ声が寝てる。」って言われて、ほんとうに驚きました。私が寝床を離れてから三時間はたっぷりたっていましたし、普通に会話していましたから。それでも、声、だけを必要とする専門家の耳で聞き分けると、しろうとである私の声は「まだ眠っている」というんですネ。面白いなぁ、と思いました。（ＦＭ東京「朝が来ても」一九七九（昭和五十四）年五月十日、一頁）

○先日、小田原まで行って来ました。昔の先生［福田正夫］のお墓参りに、世話になった弟子どもが寺に集ったのですが。梅雨（つゆ）の晴れ間の真夏日で、ジリジリと暑い一日でした。（ＦＭ東京「クリーン作戦」一九七九（昭和五十四）年七月六日、一～二頁）

○初任給十八円もらってたいへん感動したのを思い出します。就職したとき親に買ってもらった印鑑を以来四十一年、同じ会社で使い続けて、一本九十銭の白い象牙の印鑑がいまはメノウ色に変っております。いまではそれを見ると、自分の骨の一部のような感じさえいたします。（「私の自叙伝」『図書』第三六一号、一九七九（昭和五十四）年九月一日、八頁）

一九八〇（昭和五十五）年　満五十九歳―満六十歳

○三月、散文集『焔に手をかざして』筑摩書房刊。（自筆年譜）

一九八一（昭和五十六）年　満六十歳―満六十一歳

○五月、『ユーモアの鎖国』講談社より再刊。十一月、編著『家庭の詩』（詩のおくりもの3）筑摩書房刊。（自筆年譜）

一九八三（昭和五十八）年　満六十二歳―満六十三歳

○九月、『現代の詩人5　石垣りん』中央公論社刊。（自筆年譜）

○年譜と自作自解が私のする僅な仕事だったけれど、自分の年譜など考えた事もなかったので大弱り。そうだあれがあった、と積み重ねた本の山の中から取り出した原稿用紙百八十枚ほどのコピー一綴り。一昨年、卒論に石垣りん論を書くので年譜の資料として戸籍謄本を見せて下さい、と遠路はるばる尋ねてこられた山梨県都留文化大学の学生さんがいた。「それは困ります」と、あまり積極的に協力しなかった。前非を悔いる。部厚い卒業論文を参考にしながら年譜を作成。清由岐代さん有難うございました。（未発表作品「ひとの力ばかり借りて」一九八三（昭和五十八）年八月三日、二～三頁）

○私が［増山］たづ子さんにはじめて会ったのは昭和五十二年二

月、東海テレビがドキュメンタリー『浮いてまう』を制作した、その仕事に同行の折りでした。やがてダムに沈む岐阜県徳山村、けれど村の人は話していて「沈む」という言葉を使いませんでした。「浮いてまうでの」と言います。たしかにはたから見れば沈む、住んでいる人からは自分たちの暮らし全体が浮き上がってしまうことに違いないのでした。（中略）「行方不明の夫が帰って来た時、家が無うなっていては困る」とたづ子さんはダム建設に反対でしたが、国の方針には到底さからえないと知った時、せめて村の形見（自分の村の写真を撮り、ふるさとを、ふるさと人を、かたちにして一冊の写真集にまとめられた）を残そうとした。（中略）「私の人生は倖せ」だったという、その明るさと写真集の明るさを重ね合わせて、切なく美しいと思います。（増山たづ子『故郷（ふるさと）　私の徳山村写真日記』一九八三（昭和五十八）年九月二十八日、表紙カバー折り返し）

一九八四（昭和五十九）年　満六十三歳―満六十四歳

○四月、詩集『やさしい言葉』花神社刊。（自筆年譜）

○日本が経済的に高度成長して、以前よりゆたかになっているとしたら、物質面でひととおり充足した後の願望として心の要求が表面に出たきた、生きがいなどが問題になってきたことだろうと思います。（中略）私は、生きがいはたとえば、マラソンの出発点にあるのではなく、夢中で走り終えた後で感じる一瞬のものではないか、と考えています。その際、一着でなければ満足出来ない、というのとも少し違うと。（〝生きがい〟を考える『毎日中学生新聞』一九八四（昭和五十九）年三月二十六日、一面）

一九八七（昭和六十二）年　満六十六歳―満六十七歳

○十一月、詩集『略歴』石垣りん文庫3として再発行、花神社刊。十二月、文庫『ユーモアの鎖国』筑摩書房刊。石垣りん文庫4『やさしい言葉』花神社刊。（自筆年譜）

○新年を明日にひかえて餅を買うことの出来ない極貧の親子を、作者［千家元麿］は神のつかわした、気高く美しい心の母と二人の天使ではないか、と見た。そう言わずにはいられないほどの、生きる悲しみを見た。詩をよむことで私もまたその場に立ち会うのですが、どうして悲しみがこんなに人間をせつなく美しくするのか、と考えてしまいます。人を苦しめる貧乏なんてまっぴらなのに。三人の行手に待っていたのが、戦争だった歴史を知れば尚更に。現在私たちの国は金持になったというけれど、「三人の親子」が生きた時代とは別種の貧しさに追い立てられているような気がします。その後姿は気高くも見えず、おとなしい天使とも違っているのではないかと。（「寒い町」『詩の中の風景』、一二五頁）

一九八八（昭和六十三）年　満六十七歳―満六十八歳

○二月、石垣りん文庫1『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』花神社刊。この年「歴程」同人を辞す。（自筆年譜）

○暑さがすべり込みで間に合ったような今年の夏、書店の新刊を積み並べた中から江成常夫さんの『シャオハイの満洲』を求めてきました。残留孤児と呼ばれる人々の顔写真と、語りかけて

くるその辛酸。（中略）「お辞儀するひと」を読んで以来、こちらを向いて頭を下げている女のひとを忘れることが出来ません。読むたび、思うたび、私も会釈いたします。熱い心で。（「会釈」『詩の中の風景』、七八～七九頁）

○私は結婚しないまま年をとりました。したがって自分の家庭をつくることもなく。（中略）人生への懐疑と言っては大袈裟ですが、成人したら結婚する、子を生む、というごく自然な道筋をそれて、いつの間にか別の方向に来てしまいました。戦前戦後を通じ銀行員として四十一年、定年退職して十余年。状況に変化はありましたが、運命に立ち向かうには怠惰で受身な歳月だったと思います。（中略）この穏やかに静止している詩句「――家庭のない創造のみじめさ。」が、なぜいまもって私を揺するのでしょう。ことに最終行が。（「揺れる」『詩の中の風景』、一一～一二頁）

○先年、外国の方に通訳つきで尋ねられたことがありました。長い間あなたはなぜ詩を書いて来たのか、その理由は?、と。首をひねって答えました。私にとってはごく自然な行為だったこと、下手の横好き、馬鹿のひとつ覚え――答えながら、その先の考えをたどりました。（中略）「私は自分の言葉が欲しかったのだろうと思います。これだけは言いたい、これを言うからにはどんな目に会ってもいいと。たぶん、そういうことだったんです。」（「歌う」『詩の中の風景』、一一二～一一三頁）

○私たちはなぜか先を急ぎ、突っ走っているもののようです。速度を増した分だけ、距離も面積も情緒も、縮み上がってしまうのではないかと不安です。困ったことに歳のとり方も、ここにきてバカに早いのです。（「架け橋」『詩の中の風景』、一一五頁）

一九八九（昭和六十四・平成元）年　満六十八歳―満六十九歳

○二月、弟達雄死去。五月、石垣りん文庫2『表札など』花神社刊。散文集『夜の太鼓』筑摩書房刊。（自筆年譜）

○この夏、私は何度か竹の笑う声を聞いたように思いました。（中略）「風景」が収録されている詩集『竹の思想』［伊藤桂一著］の中には〝竹があると／山はやさしくなる／竹が／あまえるので〟〝私がこの世で学んだことといえば／自身をぐるりにどう美しく溶かしきるか／ということだけだった〟という詩句があって、かたくなな心、溶けたくても溶けない私に手をさしのべてくれます。（「竹の声」『詩の中の風景』、四六～四七頁）

○誕生のそのときから、子は既に母親から出発していたのだと気が付きます。抱かれているのは作者自身の心だったのかと。いくつになっても、という言葉がよみがえってきました。母はそうして自分の思いを抱き続け、子と別れ続けて生きるのでしょうか。戸口のような所に、母の座が見えてくるような。そんな感じ方で私はこの詩を腕の中で、もう何年か記憶してきました。（「抱く」『詩の中の風景』、一二一頁）

○「戦いと飢えで死ぬ人間がいる間は／おれは絶対風雅の道をゆかぬ」現世をふまえて、そう言わずにいられなかった中桐さん。私はいったいどの道を来たのだろう、と振り返りました。若いとき、詩を書くことを趣味などと言われるのは不満でした。気負っていたのですね。今はどう言われても仕方がないと思っています。ただ精一杯生きて、少しばかり物を書きました。それ

が何になった？何の用にも立たなかったというのが実感です。自分ひとりのわがままに過ぎなかったと。（「道」『詩の中の風景』、七一頁）

○新幹線で東京から西へ向かうとき、五分もたたないころ、たくさんなビルに混じって右手遠くにあらわれる、ひときわ堂々とした高層の建物。あれは何だろう、会社でもホテルでもないような。最上階の窓に光る一列の装飾灯は、宴会場を思わせました。それが病院とわかったのは、弟が入院する少し前でした。（中略）今年の二月、弟は逝きました。年末年始を送り迎えた病院、近接駅のホームからいまも見えるあの階のあの窓。（「窓」『詩の中の風景』、一二二～一二三頁）

○働きながら小さな詩を書いてきて、そのことを趣味などと呼ばれた時に感じた抵抗、まはたひそやかな反発。趣味なんかじゃない、遊びでもない、もっとせっぱ詰まった希求、と思い込んできた長い月日。若かったのだな、と思います。いまとなってみれば、国や家や職場といった周囲の状況に支配なされながらも、精一杯生きてきた、ささやかながらしたいことだけは確実にして来たのだ、あれが遊びでなくて何であろう、と思います。つまりは夢中、遊びという言葉がぴったり当てはまってきます。（「手をふるもの」『詩の中の風景』、一一〇頁）

一九九〇（平成二）年　満六十九歳―満七十歳

○昨年［一九九〇］十月二十七日、檜町（ひのきちょう）小学校、中之町（なかのちょう）幼稚園の百周年を祝う会に出席したとき、受付で「昭和七年」と書かれた名札を渡されました。それが私の卒業年であり、七の下に0を付けると、ちょうど自分の年齢になるということを胸に留めました。（中略）震災、戦災等で、母校の建物三代の変遷は珍しいことではないとしても、校名三代というところが外にもあるだろうか、と考えます。中之町小学校、乃木国民学校、檜町小学校の推移は、戦前・戦中・戦後の日本の歴史。三題話めきますが、近くに三つの連隊がありました。一昨年、久しぶりで赤坂に行った時、なつかしい学校が工事現場に変わっているのに驚き、三分坂上の仮校舎をたずねました。そこは近衛歩兵第三連隊の跡地、庭に残った桜の太い幹には、兵士たちの歩調が、年輪として刻まれていました。（「いまも子供」『ひのき』第四十一号、港区立檜町小学校ＰＴＡ、一九九一（平成三）年三月十五日、一三頁）

○若い日に私もただ青いばかりの絵を描いた覚えがあります。職場のサークル、絵画部に入りたてのころ、鎌倉への日帰り写生旅行に同行しました。（中略）同じ青でも、微笑する少女の描いたのが永遠の未来なら、二十歳すぎて私が描いたのは近い将来、つまりは年とった私の現在、を形に現していたのかもわかりません。苦い笑いを笑うばかりです。（「青い絵」『詩の中の風景』、二八～二九頁）

○去年弟と永別して、半年以上たった時のこと。それまでにも何回か行っていた美容院で、いつもの担当者が私の髪をカットしながら「髪がしっかりしてきましたね」と言うのを聞いて驚きました。こちらの事情を知る筈のない人が、ただ髪の手応えで、いのちの根元のようなところに触れているのに。私は黙っていました。悲しみはこのさき癒されることはないだろうと

思っているのに、体は少しずつ立ち直ろうとしているのかと。（「あずかり知らぬところ」『詩の中の風景』、五一頁）

○女の付属品は、単純にアクセサリーと考えればよいのでしょうか。私には捨てるほどの装飾品を持ち合わせる余裕もなかったし、第一似合わない。それでも体裁にこだわる、みにくい自分を包みかくしたいという心の装身具は、若い時からたくさん付けてきたと思います。（「鏡」『詩の中の風景』、一一六頁）

一九九一（平成三）年　満七十歳―満七十一歳

○通り越して来た戦中・戦後の、どこを振り返っても、これで安心という日の何という乏しさ。生まれてこなければよかった、と思うこともありました。そんな時です、この詩にめぐり会ってからは、人生の応援歌のように聞こえてくる最後の一行。［金子光晴「森の若葉」］――生れたからはのびずばなるまい　胸の奥の方から沸いて出る、こちらは歓声ならぬ静かな言葉の波長。年老いて先立って行く者が、後に残す思いの深さ、切なさが伝わってきて、敗北した高校野球の選手のように、健康な涙をどっさり流したくなります。（「誕生」『詩の中の風景』、三九頁）

○元旦の日の出を生中継する、テレビの企画「日本の夜明け」に詩を書き添えて来て十年たちました。（中略）以来私は太陽に向かって手を合わせるようになりました。ずいぶん勝手な話です。「どうぞ詩を一つ授けて下さい」などと願うのですから。「太陽の光を提灯にして」は、その一回目に使用したものです。（「初日」『詩の中の風景』、一三〇頁）

一九九二（平成四）年　満七十一歳―満七十二歳

○九月、文庫『焔に手をかざして』筑摩書房刊。十月、編著『詩の中の風景』婦人之友社刊。十二月、大活字本『夜の太鼓』埼玉福祉会刊。（自筆年譜）

一九九四（平成六）年　満七十三歳―満七十四歳

○十二月、大活字本『焔に手をかざして』埼玉福祉会刊。（自筆年譜）

一九九七（平成九）年　満七十六歳―満七十七歳

○一月、選詩集『空をかついで』童話屋刊。（自筆年譜）

一九九八（平成十）年　満七十七歳―満七十八歳

○六月、文庫『石垣りん詩集』角川春樹事務所刊。（自筆年譜編集者作成部分）

二〇〇〇（平成十二）年　満七十九歳―満八十歳

○三月、『表札など』十月、『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』童話屋より再刊。五月、ＮＨＫニュース番組「おはよう日本」に出演。（自筆年譜編集者作成部分）

二〇〇一（平成十三）年　満八十歳―満八十一歳

○二月、文庫『夜の太鼓』筑摩書房刊。六月、『略歴』童話屋より再刊。（自筆年譜編集者作成部分）

二〇〇二（平成十四）年　満八十一歳―満八十二歳
○六月、『やさしい言葉』童話屋より再刊。（自筆年譜編集者作成部分）

二〇〇四（平成十六）年　享年八十四歳
○六月、脳梗塞で都立荏原病院入院。十二月七日、杉並区の浴風会病院へ転院。同所に入園する弟利治と再会を果す。二十日後、十二月二十六日、心不全のため死去。享年八十四。（自筆年譜編集者作成部分）

二〇〇五（平成十七）年
○一月十五日、両親の眠る南伊豆町西林寺へ納骨。二月七日、お茶の水・山の上ホテルにて、「さよならの会」が行われ、およそ三〇〇人の参加者が詩人を見送った。（自筆年譜編集者作成部分）

出典一覧（発表順。四随筆集及び『現代詩手帖特集版』を除く。）

ＦＭ東京「挨拶」一九七六（昭和五十一）年一月二十六日
ＦＭ東京「世論づくり」一九七六（昭和五十一）年四月二十六日
ＦＭ東京「道」一九七六（昭和五十一）年五月十七日
ＦＭ東京「スナップ」一九七六（昭和五十一）年五月二十四日
ＦＭ東京「遠くからの風」一九七六（昭和五十一）年八月九日
未発表作品「無題」一九七九（昭和五十四）年
ＦＭ東京「朝が来ても」一九七九（昭和五十四）年五月十日
ＦＭ東京「クリーン作戦」一九七九（昭和五十四）年七月六日
「私の自叙伝」『図書』第三六一号一九七九（昭和五十四）年九月一日
未発表作品「ひとの力ばかり借りて」一九八三（昭和五十八）年八月三日
増山たづ子『故郷（ふるさと）　私の徳山村写真日記』一九八三（昭和五十八）年九月二十八日
〝生きがい〟を考える『毎日中学生新聞』一九八四（昭和五十九）年三月二十六日

（参考）

深尾須磨子をしのぶ会にて（撮影時期不明）
○で囲った人物が石垣りん。灰と黒の縦縞の服を着ている。
（提供西原大輔）

南伊豆町立図書館。石垣りん文学記念室がある。（撮影竹中典子）

（たけなか　のりこ　安田女子大学大学院修士課程修了生・
にしはら　だいすけ　東京外国語大学教授）